「なんか知らんが勇者に選ばれた」

けちゃ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「なんか知らんが勇者に選ばれた」

【Ｎコード】

Ｎ７７１５Ｙ

【作者名】

けちゃ

【あらすじ】

テキトー勇者と仲間の怠慢冒険！

ボケありツッコミありメタありバトルあり（？）ラブコメあり（？）

残念系ほのぼの冒険コメディーファンタジーストーリー！↑

「旅にでるならお金だよね」（前書き）

はじめまして、けちゃといいます。初投稿なので拙い部分もあるかと思いますが、よろしくお願いします。

「旅にでるならお金だよね」

静かで清々しい昼下がり。

「いやー、堂々と民家漁るのはいいもんだねえ。お、旅人の服発見」

タンスを開きながら俺が言うと、

「勇者さん・・・あんまりそういうことというもんじゃないですよ・・・」

と、僧侶ちゃんに怒られた。いやあ、怒ってても可愛いなあ僧侶ちゃん。

「ま、貰えるものは貰っておいたほうがいいんじゃない？貢ぎ物だと思って。」

などと地味に腹黒いことを言うのは賢者。おねーさんキャラだが驚くほどつるぺｔ「消すわよ？」ごめんなさい何も言ってません。

「にしてもお前ら面倒なことしてるなー。タンスごと持ってけばいいじゃないか」

・・・。このガチムチマッチョは戦士。アホ。キング・オブ・アフォ。Ａ・Ｆ・Ｏ。

・・・いきなり俺が勇者だと告げられ、王様に１００Ｇと銅の剣を貰って旅立ってはや数ヶ月。
勇者の動き（強奪）も様になってきた。
しかしこれから世界救いに行くってヤツに１００Ｇ＋安物の剣って・・・俺達の国そんなに財政難だったのか・・・。

今は俺達の住んでいた城下町から北東の、小さな村にいる。
「それにしても静かでいい村ですね。自然も綺麗ですし・・・。」
僧侶ちゃんがそんなことを言うと戦士は、
「そうかあ？何もない村だし、早く洞窟の魔物片付けちまおうぜ！」
とか言い出した。この脳筋には自然を楽しむ感性はなかったらしい。
とはいえこの村が魔物に困らされているというのは聞いているので、
「取り敢えず今日はもう日がくれるし、洞窟は明日にしないか？」
とみんなに聞くと、
「いいんじゃない？夜出歩くのは危険だしね。」
と賢者。
「じゃあもう飯が食えるんだな？ヒャッホウ！」

・・・なんで俺コイツ仲間にしたんだっけ・・・

「旅にでるならお金だよね」（後書き）

まだまだ始まったばかりですが、意見要望質問アドバイス等あると嬉しいです！

「裏目に出ることってあるよね」

翌日、俺達は村の近くの森の奥にある洞窟に向かった・・・のだが。

「迷った・・・」

森は薄暗く、目印もないのですぐに迷ってしまった。

「しかし勇者が道に迷うなんて珍しいなー！リンゴも木から落ちるってやつか？」

・・・戦士のアホが何か言ってるので、ツッコんだら負けかと思いつつも、

「お前はアレか、万有引力でも発見したのかニュートン戦士」

と、きちんとツッコんでやる。

「それを言うならサルですよ戦士さん・・・」

俺の態度とは逆に、優しく教えてあげる僧侶ちゃん。マジ天使。

「なにはともあれ、早く進まないとまずいんじゃないかしら？」

賢者が話を進めてくれる。確かに出てくる敵は雑魚とはいえ、このままでは消耗してしまう。

「じゃあ、どっちに進む？僧侶ちゃん。」

まずは進まないと埒があかないので、俺はひとまず僧侶ちゃんに聞いてみる。

「え？じゃあ東に・・・」

「西か」

「西だな！」

「西ね」

「えええええ！ひどいです皆さん！何で聞いたんですか！」

僧侶ちゃんの勘が驚くほど当たらないのはここまでの短い旅で嫌というほど思い知った。

「ぐすん・・・皆さんが私のことイジメます・・・」

「ま、方向は決まったし進みましょうか。」

拗ねてる僧侶ちゃんを華麗にスルーして賢者が歩き出したので、俺と戦士も後に続く。

「ふぇぇ・・・おいてかないで下さいぃぃぃぃぃ！」

僧侶ちゃんの指すほうと真逆に歩き続けると、洞窟の入り口が見えてきた。

「ここまで完璧に当たらないなんてな・・・流石の俺も目からゴボウだぜ・・・」

「ずいぶん斬新な目をしてるんだなお前は」

僧侶ちゃんが落ち込んでいるのでそれを言うならウロコだと正してやる人もいない。

「戦士の中ではことわざがマイブームなのかしらね・・・」

賢者はそう言うが、そうだとしたら迷惑この上ない。ツッコむ方の身にもなってくれよ。

まあそれはおいといて、

「さて、気を取り直してダンジョン攻略といきますか！」

「涙目上目遣いは反則だろう」

「暗いな・・・」

洞窟に入ると、日の光はすぐ届かなくなった。最近までは炭鉱だったらしいのでところどころに松明があって先には進めるが、かなり薄暗い。

「か、かなり暗いわね・・・」

賢者はそういって俺の服の裾をキュッとつまんでくる。あれ、こいつもしかして・・・

「暗いトコ怖いのか？」

「ばっ、そ、そんなわけないじゃない！はぐれると大変だと思っただけよ！」

そういうので賢者の手を離し、サッと離れてみると、

サッ。
ピタッ。
サッ。
ピタッ。

賢者はしっかりくっついてくる。更にからかおうと思ったが、賢者が涙目で見上げてくるのでやめた。賢者にも苦手な物があったとはな・・・

「二人とも、何遊んでんだ？」

戦士が聞いてきたのでなんでもないと答えておく。

「それにしても何か出そうですね・・・」

と、僧侶ちゃんが言う。どうやら僧侶ちゃんも多少怖いらしい。

「や、やめてちょうだい僧侶ちゃん・・・」

だが賢者の方が重傷のようだ。このままでは女子勢が使い物にならないので俺は、

「大丈夫大丈夫、最初のダンジョンなんてどのＲＰＧでもお試しみたいなもんだし、何も出ないよ。」

と言ってやる。

「ＲＰＧ？なんだそりゃ？」

俺のメタ発言に首をかしげる戦士。

「そ、そうよね、最初のダンジョンなんてト〇ワの森みたいなもんよね！」

いや、トキ〇の森は最初にしては結構むずかったような・・・

まあ効果はあったようなので敵を蹴散らしつつ進むと、光が漏れ出る部屋のようなものがあった。

「ここか・・・」

俺は部屋のドアの隙間から中を伺う。するとそこには？？？！

「賢者さんマジぱねえっす」

（な、なんかカン○タみたいのいるーーーー！！）

中を覗いた俺は、中にいたヤツに驚愕する。

なんだあの覆面上半身裸男・・・モロにカンダ○じゃねえか・・・みんなカ○ダタわかるかな、ドラ○エ３の。まあわからん人はググってくれ、見た目が一発でわかる。

なにはともあれ、俺は呼吸を整えてみんなのところに戻る。

「ど、どうでした？」

と、僧侶ちゃんが聞いてきたので俺は答える。

「あ、ありのまま見たことを話すぜ・・・扉を開けたと思ったらカンダ○がいた・・・。何を言っているのかわからねえｔ（ｒｙ」

かくかくしかじか

「じゃ、そいつをぶっ倒せばいいんだな？単純明快じゃねえか！」

恐らく話を一割程度しか聞いてなかったであろう戦士が言う。

俺は四字熟語が珍しくあってるのに驚きつつも頷く。

「それで、その人（？）はあの部屋にいるんですか？」

僧侶ちゃんが聞いてくる。

「ああ、子分も一緒みたいだ・・・ってあれ？賢者は？」

その時、ガラガラガラガラズドーン！と背後でものすごい音がした。
俺は嫌な予感に冷や汗を流しつつも、後ろを振り返る。
するとそこには、もうもうと立ちこめる砂煙の中、瓦礫をまたいでこちらに歩いてくる賢者が。

「え、えと・・・なに、したんだ？」

俺が恐る恐る聞いてみると賢者は、

「倒すのも面倒だし、洞窟にの天井崩して入り口ふさいできたわ。」

な、なんて卑怯な！もしかしたらバトルシーン期待してくれてた人もいるかもしれないのに！

「あーっ！俺が戦いたかったのに！」

張り切っていた戦士が嘆く。

「戦闘なんてバカのすることよ。生き物を殺す手段なんていくらでもあるわ」

こ、こえええええぇぇぇぇ！！やっぱ黒いよこの人！色々と！そして暗いトコから早く出たいだけだよ絶対！

「さ、みんな行きましょう」

笑顔が怖いです賢者さん。

まあ一応問題は解決したし村に戻る。（帰りは迷わなかった）
すっかりあたりも暗くなっていた。もう今日は休もう・・・

「なんでみんなグー出すかなぁ・・・」

翌朝、村長の爺さんのところに報告に行くと、

「ほっほっほ、おぬしらならやってくれると思っとったわい」

とか余裕なこと言われた。

なんとなくイラッときたので、俺は爺さんの頭にモンゴリアンチョップを食らわせ、報酬と壷の中身を拝借して家を出る。

今日はこの村で一日休む予定なので、各自思い思いの過ごし方をしている。

ちなみに俺はジャンケンで負けたので村長への報告だ。

俺は特にすることも無いので、みんなの様子でも見に行こう。

道具屋や武具屋が並ぶところに行くと、僧侶ちゃんが薬草を選んでいた。

俺は後ろからそっと声をかけてみる。

「いつもありがとね、僧侶ちゃん」

「ひあぁっ！？え、あ、勇者さん、驚かさないでくださいよ！」

どうやらおどかしてしまったらしいので、素直に謝る。

「それにしても珍しいですね、勇者さんも買い物ですか？」

「いや、買い物は僧侶ちゃんに任せてるからね、いつもありがとう。」

基本的に俺たちの財布は僧侶ちゃんが握っている。
というか他の三人は稼ぐことはできても管理ができないのだ。

「あ、い、いえ、どういたしましてっ！」

俺がお礼を言うと、何故か赤くなる僧侶ちゃん。・・・そんな要素あったか？

「じゃ、これ以上買い物の邪魔してもあれだし、もう行くね」

俺は手を振って立ち去る。

「あ、全然邪魔とかじゃ・・・」

僧侶ちゃんが何かゴニョゴニョ言っているような気がするが、おそらく気のせいだろう。

さて、一旦宿屋に戻るかな・・・。

「筋肉さんがこーむらがーえった、ってか」

俺は村をブラブラしながら宿屋に戻る。
すると宿屋の庭に戦士がいた。

「・・・フッ！フッ！おお、勇者じゃねえか！」

・・・半裸で。
俺は無視を決め込むことにする。こんな半裸男知るものか。

「あ、ちょっと待てよ、どこいくんだ、お前も筋トレしていこうぜ！」

「なんだ、俺はアリの行列を眺めるのに忙しいんだ」

「俺の存在アリ以下！？」

やっぱりほっとくとうるさそうなので相手をしてやろう。
落ち込んで肩を落としながらベンチプレス（１１０ｋｇ）を持ち上げる戦士に俺は尋ねる。

「しかし、こんな量の筋トレグッズ、どうしたんだ？」

戦士の周りにはよくわからない器具が並んでいた。俺にわかるのはダンベルくらいだ。

「ああ、ここの宿屋のご主人が筋トレ好きで意気投合してな、貸してもらったんだ。」

「昨日お前と宿主さんが夜遅くまで二人で飲んでたのはそのせいか・・・」

昨日の夜は二人の太い声が宿屋中に響き渡っていた。

「おう、というわけで勇者、お前も筋トr「断る！」」

こいつの筋トレなんか付き合ったら3日は筋肉痛で動けなくなる。

なんせこいつが片手で何度も持ち上げるダンベルですら、俺は両手と全身を使ってもかすかに浮くだけなのだ。

決して俺が弱いわけではない。むしろ平均よりは上くらいだと思っている。

こいつの筋肉が異常なのだ。

「なんで断るんだよー。筋肉あれば嬉しいなっていうだろ？」

「俺は別に必要以上の筋肉は要らないしお前と違って勇者だから魔法使えるしそもそもそれは備えあれば憂いなしって言ってもはや憂いなしの部分すら変わってるぞとかつっこんだりしてる間に俺はさっさと逃げさせてもらう、じゃあな」

「お、おう、じゃあなー」

大変な目に遭うところだったぜ。

賢者は宿屋の中かな、なんとなく。行ってみよう

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7715y/

「なんか知らんが勇者に選ばれた」

2011年11月28日01時51分発行